福岡県立大学看護学部紀要 3，65-73. 2006
FPU Journal of Nursing Research 3, 65-73, 2006

看護大学生の死についての態度構造の縦断的研究

堀内宏美*，奥祥子**，中俣直美*，塚本康子***，牛尾禮子****

Longitudinal Study on Nursing University Students' P.A.C. Toward Death

Hiromi HORIUCHI, Shoko OKU, Naomi NAKAMATA, Yasuko TSUKAMOTO and Reiko USHIO

Abstract

The purpose of this study was to clarify the attitude of nursing students from their own experiences and level of education.

The subjects were three 4th year female students from a nursing university, who had participated in the same kind of study when they were 2nd year students.

The personal attitude construct analysis was used for analyzing the attitude construct. Cluster analysis was used for the statistical technique.

They were given an explanation about the purpose of the study and were told that their participation did not influence their record appraisal. The study was done with their consent.

The results were as follows:

① When the participants were in their 2nd year, death was not realistic at all for them. However the second study showed their change of attitudes toward death: they now accept the reality of death.

② Both as human beings and nursing students, they had realized that they themselves are helpless against the inevitability of death.

③ As for their own death, even just before graduating, they didn't take this to be actual or realistic.

Key Words: death, Personal Attitude Construct, PAC Analysis, Cluster Analysis, Nursing University Student

要　旨

研究の目的は，看護学生の死についての個人の態度が，学年進行に伴う学生個人の体験や看護教育とどのように関連するのか，PAC分析を用いて明らかにすることである。

対象は，すべての臨地実習を終えて卒業を直前に控えた看護大学4年生で，2年次に同様の調査に協力した経験を持つ女子3名である。

倫理的配慮として本調査の目的を説明し，研究協力と成績評価には関係がないことなどを説明し同意を得た。

その結果，以下の3事項が明らかになった。

① 死を現実的でないと否定する傾向から，死を現実のこととして意識するようになっていた。

② 人間としても，看護師を目指す人としても，死の前には無力であると認識していた。

③ 自己の死に関しては，卒業直前に至っても意識されない傾向が認められた。

キーワード：死，態度構造，PAC分析，クラスター分析，看護大学生

*鹿児島大学医学部保健学科
Department of Clinical, School of Health Sciences, Faculty of Medicine, Kagoshima University
**福岡県立大学看護学部
Department of Nursing Fukuoka Prefectural University
***静岡県立大学短期大学部
School of Nursing University of Shizuoka, Shizuoka Junior College
****吉備国際大学保健科学部
Department of Nursing, School of Health Sciences, Kibi International University

はじめに

死は避けては通れない事実である。しかし，ほとんどの死が病院や施設の中で行われている現代において，メディアでは毎日のように第三者の死を見聞きするわりには，自分に関わりのある人の死に接する機会は少ない。そのような中，看護師は，生きることや死を考えることを余儀なくされる（奥出，2001）。特に終末期の患者をケアする場合には，その看護師の死に対する態度や過去の体験が患者へのケアに影響するといわれている（Wilkinson, 1991；Rooda, Clements, Jordan, 1999）。藤腹（1996）は，看護者は，ひとりひとりが自分の死について考え，いつの日か迎える死のためのふさわしい準備を心がけるために自分なりに死というものを考える必要があると述べている。死の教育や臨死患者の看護教育の重要性が強調され，未来の看護師をはじめとする医療者を育てる看護系大学では，死についての教育が現在進行中である。看護教育の中での「死の準備教育」において藤枝（1986）は，一つは自分自身の死の準備教育として，もうひとつは死を迎える人へのケア提供者としての準備教育という2つの側面を持っていることを指摘している。核家族や少子化が進む中で育ってきた学生は，「生や死」を日常生活の中で体験することが少なく，実習で始めて立ち会うことも少なくないといわれる（豊田，斉藤，2000）。このような状況にある学生たちに，死について教育していくには，段階的な教育が必要になる。

看護学生の死に対する先行研究では，死に対する不安が強いことを明らかにしている（奥出，2001；波多野，村田，1981：古賀，2000；竹下ほか，2001）。また，他の先行研究によると，看護学生の死に対する考えは，学年進行とともに変化していくことが明らかにされている（竹下ほか，2001：岡田ほか，2000）。先行研究のほとんどが，死に関する質問紙による研究であり，それらは集団を対象としているものが大多数である。

濱口，小島，小松（1990）は，学生の死生観が，「実習前は，死に関して，観念的・理想的・一般的な内容が多く，実習後は，生や死への過程にも多く着目し，内容も具体的・現実的・個別的になっていた。」と述べている。また，古賀（2000）は，「看護学校入学後の死生観の変化は，看護基礎教育における臨地実習・身近な人や患者の死との体験・講義などが影響要因として上がっている。」と述べている。さらには，青年期にある学生たちの発達段階を考慮すれば，死生観の形成途上にあるため，死の学びには個人差があることがわかる。

態度とは，後天的に獲得され，かつ認知的に体制化されて，ある程度安定した，ある特定の対象に対する個人の心的状態で，その個人の行動を規定するものである（中島，1999）。個人別態度構造（Personal Attitude Construct 以下 PAC 分析と略す）は，特定被験者の「心理的場」「葛藤」「アンビバレンツ」「コンプレックス」などに利用できるとされている（内藤，1997）。そこで，前回著者らは，看護大学2年生を対象に，死についての個人別態度構造を調査した。その結果，死についての個人の態度として，過去の死別体験やそれに伴う心理的反応，その人との対人関係，宗教的な経験，葬送儀礼などの風習，家族の病気や障害といった変数が，個人の中でそれぞれに統合され，構造化される傾向が確認された（奥，塚本，中俣，牛尾，2002）。しかし，受持ち患者をもたない，見学実習が終了した時点での学生たちを対象として調査を行っていたためか，講義や臨地実習の関連を示す特徴は認められなかった。それならば，全ての講義や臨地実習を終了した時点で，どのように変化していくのかを明らかにしたいと考えた。縦断的に調査を行い，学年進行に伴い，死に対する考えが変化をするならば，学生個々の体験や看護教育の影響，死に対する態度変化の有無を確認するという点において意義があると考えた。よって今回は，学年進行に伴う死についての看護学生の個人の態度に，個々の体験や看護教育がどのように関連するのか，個人の態度構造を明らかにすることを目的とした。

研究方法

1．研究対象

研究対象は，看護学を専攻している女子大学生3名であり，対象者の年齢は21～23歳である。

この3名は，受持ち患者を持たない見学のみの臨地実習を終えた2年生の時期に一度，調査に協力した経験をもつ学生たちである。そして，3人の共通点としては，身近な人の死についての体験は持っていたが，受持ち患者の死についての体験は持っていないことである。今回の調査は，全ての臨地実習を終了した卒業直前に，2度目の調査協力依頼を行った結果，承諾の得られた学生たちである。

2．倫理的配慮

研究をはじめる前には，研究者が個別の説明文書を用いて，対象者に以下の説明を行った。研究の目的や意

義，調査方法，プライバシーの保護，調査時のメモや録音テープ・資料類は研究終了後に破棄すること，調査の参加は自由意志であり，調査途中であっても不利益を被ることなく参加の取り消しができること，本調査への協力と成績評価とは無関係であること，研究成果の使用目的と目的以外の使用はしないこと，対象者への研究の成果は研究終了後に配布することで結果報告とすること，などの説明である．調査協力の承諾は，説明文書に署名を得ることで確認をとり，説明文書の1枚は対象者に渡し，もう1枚を保管した．

3．研究手続き及び方法

内藤（1997）のPAC分析を用いて調査を行った．PAC分析は，単一個人の内面世界にかかわる認知・イメージ構造の解明のための道具であり，その特徴は，「自由連想」「クラスター分析」「現象学的データ解釈技法」の3つを組み合わせたことにある．この手法を用いる意義は，「操作的・実験的・（記述）統計学的手法と，間主観的・カウンセリング的・事例記述的手法の両者が包含されている」ために，「現実の人間行動を幅広く相対化してみることができる」ことにある（内藤，1997）．対象者自身の解釈を用いて，死についての考え方に注目するため，個人の内面世界を理解する手段として，PAC分析は有効であると考えた．

PAC分析は，以下のプロセスで調査を行った．（図1）

① 対象者に，連想刺激文「あなたがこれまで生活してきた中で，人の死というものを感じた場面を思い出してください．人の死に関連する重要な特徴やイメージ，言葉を，頭に思い浮かんだ順番に番号をつけてカードに記入してください．」と紙面を提示した上でゆっくりと読み上げた．そして，死についてイメージを連想させ，連想したことの一つ一つを，連想した順番にカードに記入するように求めた．自由連想で考える時間や，カードに記入される項目の数についての制限は，特に設けなかった．

② カードの記入を終えたら，「あなたにとって重要と感じられる順番に，カードを並び替えてください．」と説明し，連想項目の書かれたカードを重要順位に並び替えた後，カードの右肩に重要順位の番号を記入した．

③ 「あなたが挙げたイメージや言葉の組み合わせが，言葉の意味ではなく，直感的イメージの上でどの程度似ているかを判断し，その近さの程度を該当する数字で答えてください．」とカードを指示し，類似度距離の自己評価を求めた．自己評価は，「非常に近い：1」「かなり近い：2」「いくぶんか近い：3」「どちらともいえない：4」「いくぶんか遠い：5」「かなり遠い：6」「非常に遠い：7」の7段階の評定尺度が書かれた用紙を用いて行った．

④ 得られたデータは，ウォード法を用いてクラスター分析を行った．

⑤ クラスター分析の結果得られた樹状図の余白に，カードに書かれた連想項目を転記した．そして，その樹状図を提示しながら転記した項目を読み上げ，そのグループから浮かぶイメージや，内容のまとまりについての質問を行い，対象者自身に解釈を求めた．その会話内容は，メモによる記録と併せて，対象者の許可を得てテープに録音した．

⑥ 面接終了後，録音テープから逐語録を作成し，対象者の解釈結果をもとに，総合的な解釈を行った．

本研究の解析には，統計ソフトHALWIN(Ver.6)を用いた．

①連想刺激文の提示
↓
②イメージの連想，連想順に項目をカードに記入
↓
③項目の重要順位の並べ替え
↓
④項目間の類似度距離の評定
↓
⑤クラスター分析
↓
⑥分析結果（樹状図）の提示・内容の解釈
↓
⑦総合的解釈

図1 態度構造のプロセス

結果および考察

1．対象Aの樹状図（図2・3）

2年生の1回目の調査結果では，2つのクラスターから構成されていた．対象A自身の解釈によると，「死を美化することや，肯定しようとする傾向がある」と述

べていた。

クラスター1は，「誰にでも死は訪れる」「再出発」「家族の絆」「最初は受け入れられないもの」「喪失」「辛い」「避けられない」「悲しい」「別れ」「怖い」からなり，祖父母や叔父の死を経験した時の否定的・現実的なイメージで連想されていた。

クラスター2は，「生まれ変わる」「自然に帰る」「形がなくなる」「変化」「きれいな水色」「海」「星」「大地」「病院」「線香」からなり，幼児期の宗教的な説話からのイメージにより連想されていた。全体の構造をクラスター間の関係としてみてみると，【死への不偏性への否定的感情】→【死の幻想】という階層構造をとっていた。

卒業直前の2回目の調査では，対象A自身の解釈によると，「死に対して理想的に考える部分と，現実的に考える部分の両方が存在しているが，どちらかというとまだ怖い方が強い」と述べている。

3つのクラスターから構成され，クラスター1は，「不可避」「生の延長線上」「人生最期の時」「大切な時」「多種多様」「家族関係深める」「家族の悲しみ」「家族に囲まれて」「暖色」までの9項目でまとまっている。「不可避」から避けられないものとして，また「多種多様」や「家族関係を深める」，「暖色」などから肯定する気持ちや理想が象徴されており，死に対して実際には怖い気持ちを抱いているが，肯定的に受け入れられるようになった部分の死についてのイメージから連想

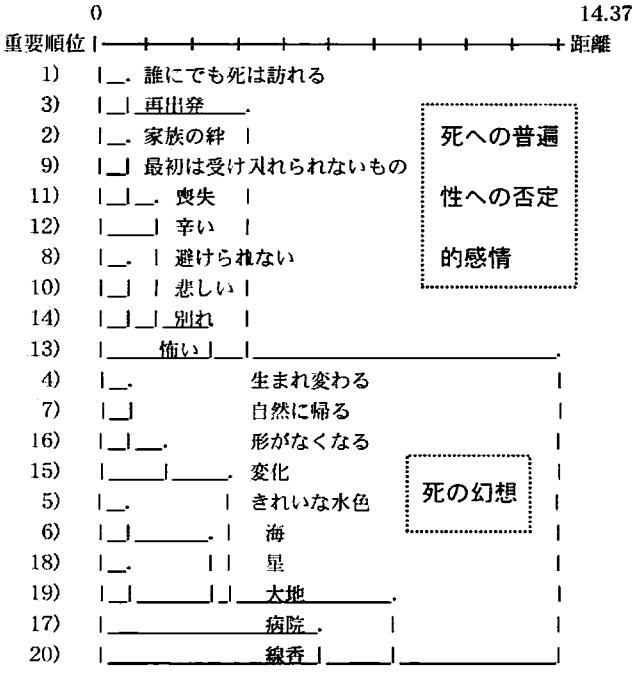

図2　対象Aの樹状図（2年次）

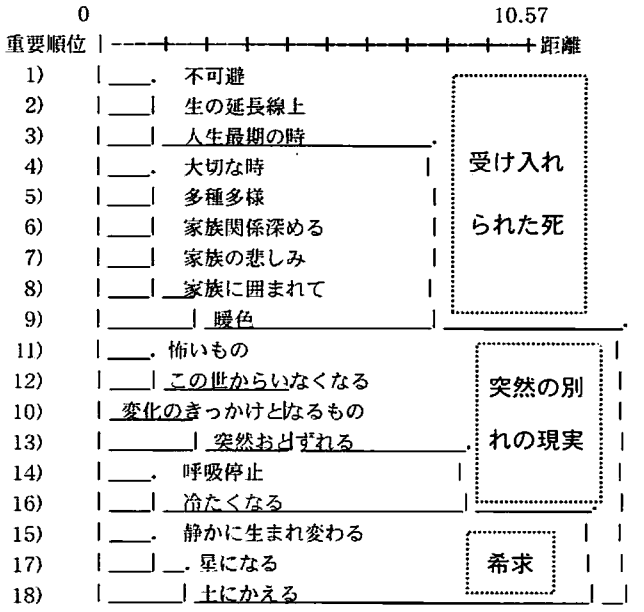

図3　対象Aの樹状図（卒業直前）

されている。

クラスター2は，「怖いもの」「この世からいなくなる」「変化のきっかけとなるもの」「突然おとずれる」「呼吸停止」「冷たくなる」までの6項目でまとまっている。「怖いもの」や「突然おとずれる」「呼吸停止」などに象徴されるように，親戚の突然の死に付き添った時のイメージから連想されている。

クラスター3は，「生まれ変わり」「星になる」「土にかえる」の3項目でまとまっている。「生まれ変わり」や「星になる」などに象徴されるように，亡くなった後の現実離れした夢のイメージから連想されている。全体の構造をクラスター間の関係としてみてみると，【受け入れられた死】→【突然の別れの現実】→【希求】という階層構造になる。

クラスターの総合的解釈は，理想の死を考えることで，ある部分受け入れられた死ができている。しかし，親戚の突然の死に付き添った体験から，突然死というまだ受容できない部分の死に対して強い恐怖心を抱いている。その恐怖心を，現実離れした空想の世界で和らげようとしている様である。

2．対象Bの樹状図（図4・5）

2年生の1回目の調査結果では，3つのクラスターから構成されていた。対象B自身の解釈によると，「全体的に宇宙の白と黒の星が散らばっていそうなイメージ」と述べていた。

クラスター1は，「生きた結果」「生まれ変わる」「笑

顔」「仏壇」「おばあちゃん」「身体がなくなる」「魂だけ残って転生する」「永遠」「冷たくなる」からなり，実際に体験した知り合いの老人の，充実した死に関わるイメージで連想されていた．

クラスター2は，「救急車の音」「病院」「眠りから覚めなくなる」「いなくなる」「まだ死ねない」「暗い」「寿命」「タイムリミット」「さようなら」からなり，まだ自分は死にたくない，家族や友人にも死んでほしくないという思いから，まとまりのないイメージで連想されていた．

クラスター3は，「夢」「海」「自殺」「記憶にない」「むなしい」からなり，夢の中で，母親が病弱な弟を背負って海に飛びこもうとしている姿を，後ろから見ている自分の悲しさのイメージで連想されていた．全体の構造をクラスター間の関係としてみてみると，【生きた結果】→【否定したい死】→【悲しみ】という階層構造化をとっていた．

卒業直前の2回目の調査では，対象B自身の解釈によると，「対照的な集まりで，複雑さと単純さを持ち合わせ，人間そのものを表わしているイメージだ」と述べている．

6つのクラスターから構成され，クラスター1は，「結果」「怒り」「絶望」「無」までの4項目でまとまっている．この部分は，テレビの事件などによる，自分の身近ではない，第三者の死を考えてイメージが連想さ

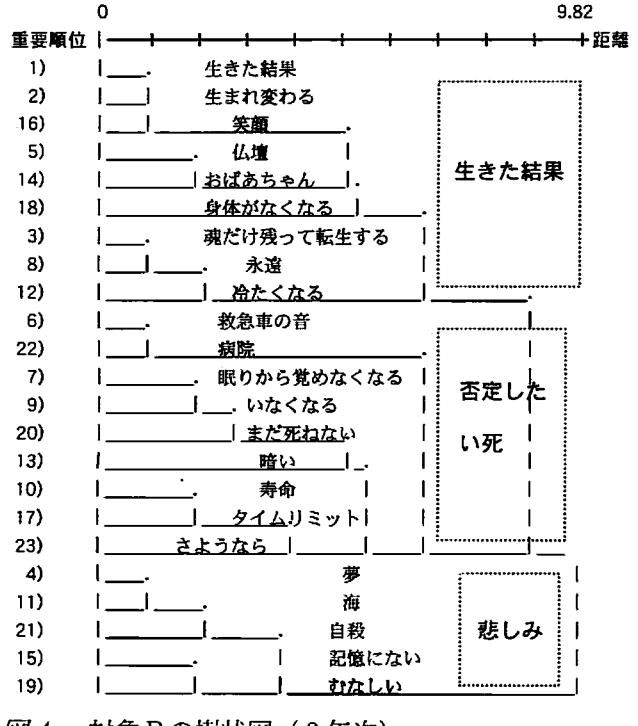

図4　対象Bの樹状図（2年次）

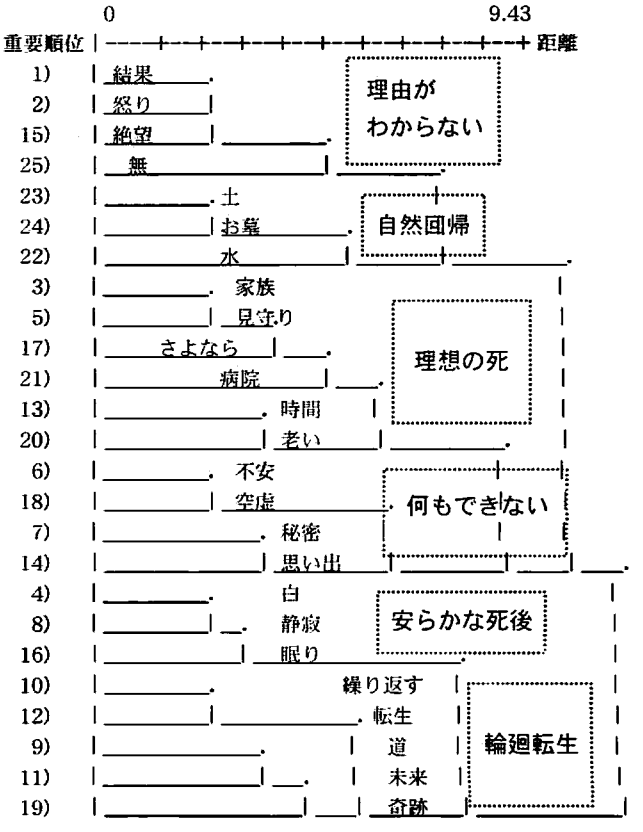

図5　対象Bの樹状図（卒業直前）

れている．

クラスター2は，「土」「お墓」「水」までの3項目でまとまっている．自然に帰るイメージから項目が連想されている．

クラスター3は，「家族」「見守り」「さよなら」「病院」「時間」「老い」までの6項目でまとまっている．「家族」や「見守り」などに象徴されるように，自分の希望する理想の死に方をイメージして連想されている．

クラスター4は，「不安」「空虚」「秘密」「思い出」の4項目でまとまっている．臨地実習での体験のイメージから，「秘密」や「思い出」，先が見えない「不安」といった項目が連想されている．

クラスター5は，「白」「静寂」「眠り」までの3項目でまとまっていた．「静寂」や「眠り」などに象徴されているのは，死んだ後の，こうあってほしいという理想であり，死んだ後のイメージを連想している．

クラスター6は，「繰り返す」「転生」「道」「未来」「奇跡」までの5項目でまとまっている．「転生」や「道」「未来」など，死後から始まることをイメージして連想されている．クラスター2の，自然に帰るイメージは，「終わり」と表現しているのに対して，クラスター6

は，「始まり」と表現して捉えられている．全体の構造をクラスター間の関係としてみてみると，【理由がわからない】→【自然回帰】→【理想の死】→【何もできない】→【安らかな死後】→【輪廻転生】という階層構造になる．

クラスターの総合的解釈は，人が死ぬということを，客観的に考え，自分の死は理想的に迎えたい，という自分の願望を抱いている．しかし，イメージを「明るい」と「闇」，「白い」と「黒い」，「暖かい」と「冷たい」，「近い」と「遠い」という対語を用いて自己解釈を行っている．このことは，死に対するイメージがアンビバレンツな両価性の感情を有していることを表わしている．自分の死を理想的に迎えたいという願望をもつ一方で，まだ死を身近ではなく，遠い存在であると思っている様である．

3．対象Cの樹状図（図6・7）

2年生の1回目の調査結果では，4つのクラスターから構成されていた．対象C自身の解釈によると，「全体的に悲しい，（従弟の死が）やっぱり信じられない．受け入れていかなきゃいけないけどまだ無理かなあ．生きているとはどういうことなのだろうという感じ．」と述べていた．

クラスター1は，「花」「笑顔」「信じられない」「非現実」「空間」からなる．調査の2ヶ月前に，仲のよかった従弟を亡くしたばかりで，その衝撃の事実を受け入れたくないという非常に強い感情が，連想項目に表われていた．

クラスター2は，「骨」「白い箱」「墓」「晴れ」からなり，従弟の死を認めたくない一方，葬儀に参加することで対峙せざるをえない死の現実から想起されていた．

クラスター3は，「母親」「涙」「父親」「悲しみ」「家族」「怒り」「親戚」「受け入れたくない」「友人」からなり，みんなが悲しんでいる様子と，死を否定しつつも，今までで一番の悲しみを感じている自分自身を客観的に自覚していることから連想されていた．

クラスター4は，「看護婦」「医師」「病院の待合室」からなった．従弟の重体の知らせを受けて駆けつけた時，病院の待合室で見た冷たい印象の医療者の姿から，敵対するイメージによって想起されていた．同年輩の従弟の突然の死が，強烈な死のイメージとなっていた．全体の構造をクラスター間の関係を見てみると，【非現実的な死】→【死後の儀式】→【深い悲しみ】→【冷徹】という階層構造化をとっていた．

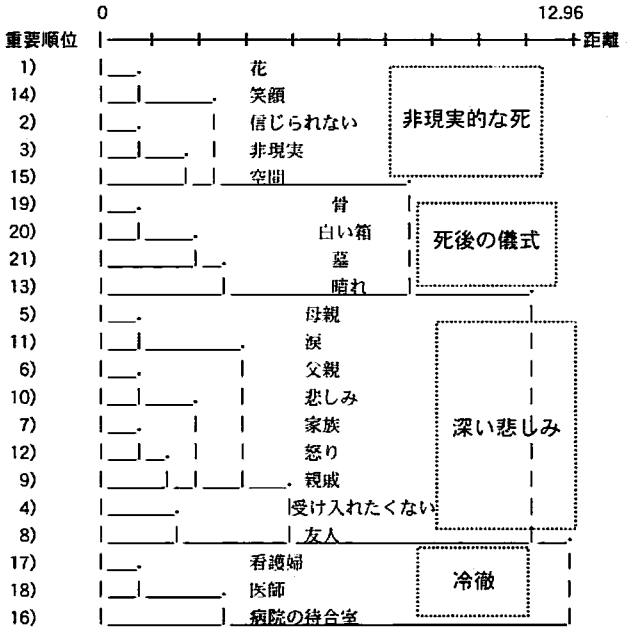

図6　対象Cの樹状図（2年次）

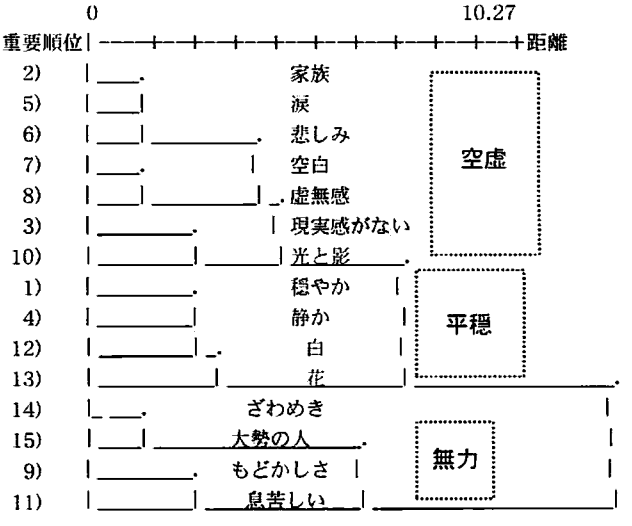

図7　対象Cの樹状図（卒業直前）

卒業直前の2回目の調査では，3つのクラスターから構成され，クラスター1は「家族」「涙」「悲しみ」「空白」「虚無感」「現実感がない」「光と影」までの7項目でまとまっている．「悲しみ」や「虚無感」，「現実感がない」などに象徴されているように，自分の気持ちの中で，人が亡くなったという現実感がもてず，何もできない悲しみのイメージから連想されている．

クラスター2は，「穏やか」「静か」「白」「花」までの4項目でまとまっている．従弟の死を認めてはいな

いが，亡くなった話を話題にされる時に，今はもう激しい感情はなく，「穏やか」や「静か」などに象徴されるような気持ちからイメージが連想されている．

クラスター3は，「ざわめき」「大勢の人」「もどかしさ」「息苦しい」までの4項目でまとまっている．「ざわめき」や「大勢の人」に象徴されるように，葬式の場面から連想されている．自分も含めて人は無力であることに苦しんでいることが，「息苦しい」に表わされている．全体の構造をクラスター間の関係としてみてみると，【空虚】→【平穏】→【無力】という階層構造になる．

クラスターの総合的解釈は，従弟の死の体験によって衝撃を受けていた頃から比べると，時間が経過したことで，心は落ち着きを取り戻してきた．がしかし，まだその従弟の死を認められず，何もできない自分に苦悩している様である．

4．総合的考察

この調査はあくまでも死についての個人の態度構造であり，看護学生の死についての態度の一般化には限界がある．そのことを踏まえて，総合的に考察をする．

受持ち患者を持たない大学2年次の1回目の調査結果では，過去の死別体験に伴う心理的反応や対人関係，宗教・葬送儀礼などの風習，家族の病気や障害といった変数が構造化されていた．人が死ぬことは怖いことである．だが，運命でもある．人は必ず死ぬということを頭では理解しているのだが，まだそこには死を現実的でないと否定したい欲求が常に存在していた．そして，自己の死についてはまだ遠い存在で，実感していないという傾向が認められていた．

今回の卒業直前の2回目の調査結果では，過去の死別体験に伴う心理的反応の変化を自分の中で意識し，それをもとに死を受け止めつつある傾向が認められた．死を現実のこととして意識すると同時に，自分も含めて人間は無力であるということを自覚していた．この死生観の変化は，臨地実習や身近な人の体験などが影響する要因となっている点で，先行研究（古賀，2000；竹下ほか，2001；林，藤田，中島，川﨑，1995）の結果と一致した．しかし，1回目の調査のみならず，2回目の卒業直前の調査に至っても未だに「自己の死」について意識が認められていない傾向が考察された．日野原，山本（1988）は，「死を理解することが深くなればなる程，ますます死に対する態度が否定的となり，自らの思考の中で死を考えることさえ拒絶し，また，死を考えさせる動機となる外的なものから眼をそむけるようになる」と述べている．さらに，波多野（1981）や奥出（2001）の研究結果からも，看護学生は，死を現実のものと捉えるにつれ，死という概念に対する不安が増強すること，そして，死が避けられず，自己の死さえも認めざるをえないことを実感し，死を拒む気持ちが強くなることを指摘している．今回の調査でも，死を現実として意識するために，死に対する不安が強くなり，自己の死を考えることを拒否していることが推察される．

河野（2000）が教養課程の大学生を対象に行った調査結果では，死に無関心なほど死への不安は弱かった．そこから，死に無関心でいることで死の不安を低めていると推察していた．一般の大学生に比べ看護学生は，臨地実習や講義の内容などから考慮して，死に対して無関心でいることが難しい環境にいるといえる．その分，自分の身近な人の死をより強く意識することになり，それにより，死と対峙し，考える機会を与えられ，死の認識を築きあげていると考えられる．しかし，それでも自己の死に対する意識が認められなかったという点で，学年進行に伴う死に対する態度に変化が認められなかった．このことは，死というものが，いつかは自分にも訪れることであり，最期は一人で死んでいかなければならないこと，さらには，死がいつ訪れるか分からない，予測ができないものであるということからしても，人間の存在の限界を感じさせるものであるために，死に対する不安や恐怖の程度が，やはり依然として大きいのではないかと推測される．

著者らは臨地実習中に，あるいは臨地実習終了後に受持ち患者が亡くなった体験をもつ看護学生の死についての個人別態度構造も調査している（奥ほか，2004）．その結果は，臨地実習中に，あるいは臨地実習終了後に患者の死を体験した学生の場合の態度構造では，身近な人の死と同じように，受持ち患者との死別体験が加味された態度構造をとるというものであった．そして，調査対象の個々の死のイメージも，肯定的なイメージを抱いており，死だけにとどまらず，自分自身の生き方について考える機会にもなっていた．一方で，今回の2度にわたる時間的経過を得ての縦断調査の結果では，死に対するイメージは，まだ否定的イメージの方を強く抱いていた．このことから，患者の死別体験の有無による差が明らかに認められた．患者の死別体験を持たない今回の学生の結果では「知識」と「感情」レベル

での捉え方が主であり，患者の死別体験をしている学生の結果では，「知識」「感情」に「価値観」が加味された捉え方になっていることが考えられる．

死生観は，ひとつではなく，個人の成熟に従って変化していくものである．今回の調査結果では，対象者3名とも死を否定しているが，死に対して混乱はしていないと考えられる．先行研究（竹下ほか，2001：岡田ほか，2000）の結果と同様に，「死」は，心理的危機感を生じさせる特定の状況であるが，死は事実であるということと同時に，自分の不安感情をもとに，自己の内観が深まり，感情のコントロールを行うことで，死を受け止めようとする作用が働いたとも考えられる．

看護学生は，健康を取り戻す，あるいは促進する援助だけでなく，死を迎えようとしている人に対しての援助も学ぶ．縦断的調査を行ったことによって，死の不安の強さが大きいことが感じられた．人間は必ず死ぬ，そして，「死」を前にして，人間は無力であることを意識したとき，そこから先をどうすすめていくのか．知識レベル，感情レベルだけの捉え方では感情の統制は弱いと推測する．そういう学生たちが，死に対峙したとき，死に対する否定的感情だけが強くならないように，不安感情の統制への援助を考えていく必要があると考察する．

自己の死を意識できないという結果において，学年進行に伴う死に対する態度に変化が認められなかった．このことは，死を否定している限り，自己の死を無意識下，あるいは日常の外に押しやっているとしても不思議ではないと考える．今後は生と死が別々に存在するのではなく，生の延長線上に存在するということ，あるいは健康という側面から死についての意識が認められないか検討を加える必要がある．

結　論

看護大学生の死についての態度構造を縦断的に調査した．その結果以下のことが明らかになった．

① 卒業直前になると，死を現実として意識するということが，態度構造に認められた．

② 死を意識すると同時に，人間としても，看護師を目指す人としても，自分も含めて死の前に人間は無力であるということを認識していた．

③ 自己の死に関しては，卒業直前にいたってもまだ意識されない傾向が認められた．

謝　辞

本調査にご協力いただいた学生の皆様に感謝申し上げます．本論文は，第24回日本看護科学学会学術集会（東京）にて発表したものに，加筆・修正を加えた．

文　献

藤枝知子，アルフォンス・デーケン，メヂカルフレンド社編集部（編）．(1986)．*看護学教育．死を教える*．171-188．東京：メヂカルフレンド社．

藤腹明子．(1996)．*看護学生のためのターミナルケア*．東京：メヂカルフレンド社．66-68．

濱口恵子，小島操子，小松浩子．(1990)．臨死患者の看護実習前後での学生の死生観の変化．*第21回日本看護学会集録（看護教育）*，123-126．

波多野梗子，村田恵子．(1981)．看護学生の終末期患者への援助的認識と看護行動傾向の学年による差異．*看護研究*，*14*(1)，62-73．

林英代，藤田泰代，中島雛子，川﨑純子．(1995)．看護学生の死生観に関わる意識変化の要因．*第26回日本看護学会集録（看護教育）*，62-65．

日野原重明，山本俊一．(1988)．*死生学1*．東京：技術出版．19-20．

河野由美．(2000)．大学生の宗教観と死観及び死の不安に関する計量的研究．*飯田女子短期大学紀要*，飯田女子短期大学，長野，17，73-87．

古賀万美子．(2000)．看護学生の死生観―死生観形成過程における看護学生の認識―．*神奈川県立看護教育大学校看護教育研究集録*，神奈川県立看護教育大学校，横浜，25，52-59．

内藤哲雄．(1997)．*PAC分析実施法入門*．京都：ナカニシヤ出版．

中島義明（編）．(1999)．*心理学辞典*．東京：有斐閣．552．

岡田まり，片岡智子，吉岡多美子，大西和子，樋廻博重，吉岡一実．(2000)．看護学生の死のイメージに関する研究．*三重看護学誌*，*3*(1)，53-59．

奥祥子，塚本康子，堀内宏美，日浦瑞枝，中俣直美，牛尾禮子．(2004)．看護学生の死についての態度構造．*鹿児島大学医学部保健学科紀要*．鹿児島大学，鹿児島，14，13-19．

奥祥子，塚本康子，中俣直美，牛尾禮子．(2002)．看護大学2年生の死についての個人別態度構造．*鹿児島大学医学部保健学科紀要*．鹿児島大学，鹿児島，12(2)，43-48．

奥出有香子．(2001)．看護学生の対象別実習前後における死に対する意識の変化．*順天堂医療短期大学紀要*，順天堂医療短期大学，千葉，12，86-93．

Rooda L.A., Clements R., Jordan M.L. (1999). Nurses' attitudes toward death and caring for dying patients. *Oncology Nursing Forum, 26* (10), 1683-1687.

竹下美恵子，魚住郁子，渡辺弥生，伊藤豊美，近藤里子，寺田美恵子，濱口高子，今井範子．(2001)．看護学生の死生観に関する研究　第3報－領域別臨地実習前後の比較－．第32回日本看護学会集録（看護総合），26．

豊田妙子，斉藤好子．(2000)．看護学生の死に対する認識変化の要因．*三重看護学誌*，*3* (1)，147-154．

Wilkinson S. (1991). Factors which influence how nurses communicate with cancer patients. *Journal of Advanced Nursing, 16*, 677-688.

受付　2006．3．8
採用　2006．3．23